

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：34105

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20225

研究課題名（和文）特別支援対象児童への学級適応支援：学級集団状態に応じたソーシャルスキルに着目して

研究課題名（英文）Classroom Adjustment Support for Students with Special Needs: Focusing on Social Skills According to Classroom Environment

研究代表者

川俣 理恵 (Kawamata, Rie)

鈴鹿大学・こども教育学部・准教授

研究者番号：00910910

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、通常学級に在籍する特別な支援が必要な子どもへの援助として、学級集団の状態に応じたソーシャルスキル教育について検討した。学級集団の状態ごとの特別な支援が必要な子ども、その他の子どもの学級適応、ソーシャルスキルの特徴を考慮して、ソーシャルスキル教育の仮説モデルを作成した。代表的な学級集団の状態の学級において、仮説モデルに基づく介入を行った結果、特別な支援が必要な子ども、その他の子どもそれぞれに一定の介入効果が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、通常学級に在籍する特別な支援が必要な子どもへの援助について、学級集団の状態に応じたソーシャルスキル教育のあり方について検討した。通常学級に在籍する特別な支援が必要な子どもは増加傾向にあり、学校現場では、彼らを含むすべての子どもが充実した学校生活を送るための援助のあり方を模索している。本研究で作成した仮説モデルによる実践は、そのような学校現場の課題の解決に寄与すると考えられる。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to examine social skills education according to the classroom environment as support for students with special needs in the standard classroom. In order to achieve this purpose, I examined the class adjustment and social skills of students who need special support and other students by classroom environment.

Based on the results, the order of target skills and specific implementation methods were organized. And hypothetical models of social skills education by classroom environment was created. An intervention based on a hypothetical model was performed in some classes corresponding to states in a representative classroom environment. As a result, a certain degree of intervention effect was recognized for students who need special support and for other students.

研究分野：教育心理学

キーワード：特別支援対象児 学級集団の状態 学校適応 ソーシャルスキル ソーシャルスキル教育

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、通常学級に在籍する特別な支援が必要な子どもが適応的な学校生活を送るための援助として、学級集団の状態に応じたソーシャルスキル教育のあり方を提案することである。ソーシャルスキルを活用することで、学校適応が促進されることから(石川他, 2007)、ソーシャルスキルは、特別な支援が必要な子どもへの援助プログラムにも積極的に取り上げられ、効果が検証されている(Carr et al., 2002; Durlak et al., 2011)。また、学級集団の状態に応じて学校適応と関連している言動は異なる(西村他, 2021)ため、ソーシャルスキル教育を通して特別な支援が必要な子どもの学校適応の支援を行ううえでは、学級集団の状態を考慮する必要がある。そこで本研究では、特別な支援が必要な子どもへの援助としてソーシャルスキルに着目し、学級集団の状態に応じた援助のあり方について検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、特別な支援が必要な子どもへの援助としてソーシャルスキルに着目し、学級集団の状態に応じた援助のあり方について検討することである。通常学級において、特別な支援が必要な子どもを含む子どもたちが適応的な学校生活を送るためには、学級集団を安心して学べる環境を作ることが重視されてきた(河村, 2010など)。その一方で、そのような状態の学級集団に在籍していても学校生活に適応できていない(河村・武蔵, 2017)、学級集団の状態の変化に伴って不適応を示してしまう(吉岡, 2009)ことも報告されており、学級集団の状態を考慮した検討が必要である。本研究では、代表的な学級集団の状態(河村, 2010)ごとに学級適応と関連しているソーシャルスキルに着目し、学級集団ごとの特別な支援が必要な子どもへの援助としてのソーシャルスキル教育のあり方を検討した。

3. 研究の方法

(1) 学級集団の状態ごとの学校適応、ソーシャルスキルの関連

A県の公立小学校4校に在籍する4~6年生1015名(男子541名、女子474名)の児童を対象として、学級適応およびソーシャルスキルに関する調査を実施した。学級適応の測定には、「学級満足度尺度」(河村, 1999)、ソーシャルスキルの測定には、「小学生版ソーシャルスキル尺度」(河村, 2002)を用いた。学級集団の状態については、河村他(2004)および、西村他(2021)を参照して分類を行い、学級集団の状態ごとに、全体傾向、特別な支援を必要とする子ども、その他の子どもの学校適応とソーシャルスキルとの関連について分析を行った。

(2) 学級集団の状態ごとのソーシャルスキル教育の仮説モデルの作成

代表的な学級集団の状態に該当し、かつ特別な支援を必要とする子どもが1名以上在籍している12学級(満足型、管理型、なれあい型、荒れ始め型の各3学級)を抽出し、学校適応、ソーシャルスキルに関する調査及び学級担任教師への聞き取り調査を行った。抽出学級の量的データ(学校適応、ソーシャルスキル)および質的データ(学級担任教師への聞き取り)を統合、整理し、学級集団の状態ごとのソーシャルスキル教育におけるターゲットスキルの配列や展開の工夫について検討した。

(3) 学級集団の状態ごとのソーシャルスキル教育の仮説モデルの効果検証

代表的な学級集団の状態に該当し、かつ特別な支援を必要とする子どもが1名以上在籍している8学級(満足型、管理型、なれあい型、荒れ始め型の各2学級)を抽出した。10月中旬~12月上旬の約2ヶ月間、仮説モデルに基づくソーシャルスキル教育の実践を行った。実践以前と実践後に、学校適応およびソーシャルスキルに関する調査を実施し、実践の効果を検討した。

4. 研究成果

(1) 学級集団の状態ごとの学校適応、ソーシャルスキルの関連

代表的な学級集団の状態ごとに、全体、特別な支援を必要とする子ども、その他の子どもの学校適応とソーシャルスキルとの関連の特徴が見出された。先行研究と同様に、満足型学級において、学校適応感が高くソーシャルスキルの得点も高かったが、同じ満足型学級に在籍していても、特別な支援を必要とする子どもとその他の子どもでは、配慮のスキル、かわりのスキルと学校適応の指標との関連の仕方に違いがみられた。管理型学級は、全体のソーシャルスキル得点が低く、特別な支援を必要とする子どもの配慮のスキルがその被侵害感を高めていた。なれあい型学級は、満足型学級に次いでソーシャルスキル得点が高く、その他の子どものかかわりのスキルが被侵害感を低めること、特別な支援を必要とする子どものソーシャルスキルは学校適応の指標と関連が見られないことが特徴的であった。荒れ始め型学級は、学校適応感とソーシャルスキル得点との関連が最も強かった一方で、それらの得点の分散が大きいために特徴的であった。これらのことから、学校適応を促すことを目的としたソーシャルスキル教育を展開する際には、学級集団の状態を考慮する必要があることが明らかになった。

(2) 学級集団の状態ごとのソーシャルスキル教育の仮説モデルの作成

学級適応およびソーシャルスキルの量的なデータの分析をもとに、学級集団の状態ごとに学校適応の2つの指標である承認感、被侵害感と配慮のスキル、かかわりのスキルとの関連について、特別な支援を必要とする子どもとその他の子どもの結果を考慮し、ターゲットスキルを配列した。その際には、学級での子ども同士のかかわりの様子や学級経営方針など、学級担任教師からの聞き取りによる情報も考慮して、実践を行う際の展開方法(メンバー構成、グループサイズ、モデルの示し方、学習したソーシャルスキルを定着させる工夫など)についても、学級の状態ごとの目安を示した。

(3) 学級集団の状態ごとのソーシャルスキル教育の仮説モデルの効果検証

代表的な学級集団の状態に該当し、かつ特別な支援を必要とする子どもが1名以上在籍している8学級(満足型、管理型、なれあい型、荒れ始め型の各2学級)において、10月中旬～12月上旬の約2ヶ月間、仮説モデルに基づくソーシャルスキル教育の実践を行った。介入前と介入後の学校適応およびソーシャルスキルに関連する変数についての調査分析結果および学級担任への聞き取り調査の結果から、仮説モデルに基づく介入により、特別な支援が必要な子ども、その他の子どもそれぞれに一定の介入効果が認められた。一方で、学級集団の状態によっては、十分な介入効果が得られなかった学級も一部存在した。このことについて、さらなる要因等の検討が必要となると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川俣 理恵
2. 発表標題 特別支援対象児童の学級適応感とソーシャルスキルの特徴に関する検討 - 時期と抱える困難さのタイプを考慮して-
3. 学会等名 日本カウンセリング学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------